

抗ガン剤無効の進行肝臓癌に対する新規治療法の開発

山崎隆弘、寺井崇二、坂井田 功：医学部消化器病態内科学（第一内科）らの研究成果が世界最高峰の医学雑誌「The New England Journal of Medicine」誌 2011.8.11 号に掲載されました。

研究成果の概要

肝細胞癌（以下肝臓癌）は、本邦における悪性新生物による死亡率第 4 位(年間約 3 万 5 千人)の癌である。肝臓癌は、早期で発見されても年率 15-20%の再発を繰り返す癌であり、やがて癌の数も大きさも増えて進行肝臓癌へと移行し、治療に反応しなくなる。現在の進行肝臓癌の治療は、抗がん剤を肝臓に直接動脈から注入する治療（肝動注化学療法）や、経口摂取する治療法しかない。これらの治療に反応しない進行肝臓癌に対しては、有効な治療法がないのが現状である。

今回我々は、肝動注化学療法で効果が認められなかった進行肝臓癌の患者さんに対して、抗がん剤ではなく、体内に過剰に鉄が蓄積する病気に対して、鉄を除去するために古くが開発された、鉄キレート剤であるデフェロキサミンを投与し、有効例があること実証した。これは、鉄キレート剤が肝臓癌治療に対して有用であることを臨床的に世界で初めて証明した論文であり、8 月 11 日付の The New England Journal of Medicine に掲載された。